

「この人の思い出」 マルコ14:1-9

- 1、「ベタニアで香油を注がれる」話しは昔から受難節に学ばれてきた。2年前の受難節にもここを学んだ。少しおさらいをしておきたい。三つの点に注目したい。
- 2、第一は、「物語」。聖書の福音の伝達には二通りある。①「信仰簡条」(信仰理論)として伝える。理性に訴える。パウロはその方法を主に用いる(ロマ1:2f)。②「物語」(文学)として語る。福音書の方法。聞く者の想像力に訴える。
- 3、第二は、「この物語」は、行為に象徴されるイエスへの「信仰告白」だという事。それはペトロの言葉の告白(マルコ8:27f)への対抗である。「イエスの体への塗油」(3節の「頭」は8節では「体」)に象徴されるイエスの受難への関わりと意味する。パウロが「キリストのために苦しむことも恵みとして」(フィ1:29)と論理で言うことを物語全体が秘めている。「ナルドの香油」とはインド産のナルドという植物から抽出される高価な香油。葬りに用いられる。300デナリオンは約1年分の葡萄園の労働者の賃金。「言葉の告白」を「実体のある告白」へと示唆される。
- 4、第三は、「無名の女」という事(ルカ、ヨハネは特定している)。らい病人シモンは男性。それと比較するとこの女の無名性は意味深長だ。苦難の広範性、深層性を暗示してはいないか。人には言えない苦しみは、イエスの受難につながることで逆説的いみを宿す、というメッセージを聞く。「この人が私にしてくれたこともまた、この人の思い出として語られることであろう」(田川訳)。ここは、イエスの出来事の記念(思い出)という意味に理解されやすいが、そうではなく、イエスにつながる「この人の思い出」という意味。人生は人には言えない苦勞をいっぱい背負い込んで成り立つ。イエスにつながる時、苦難は苦難のまま、重いままで受容される。「この人の思い出」はそのように語られる。
- 5、「受難」には、二つの面がある。ギリシャ語のパテイン(受ける)が語源。「受け身」「苦難は受けとめるもの」という面。生きるということは、多かれ少なかれ、受け身だ。私たちは「生まれてきた」と、自分の人生を表現する。主体的にとか、切り開くとか、積極的にとか、一方で言うが、しかし、受け身で受けて立つ以外にない「所与」が人生であり、歴史である。なぜ貧しいのだ、不自由なの。答えがない。不条理はそものが受苦的である。
- 6、もう一つは情熱。パッションは「受難」を「情熱」の両面を意味する。情熱的であることが「受難」の一面である。福音書の受難物語はととても情熱的である。ジョルジュ・ルオーの『受難』という画集がある。「受難」という54の連作である。詩人アンドレ・シュレアスの『受難』という詩を飾るために描かれたものだが、イエスの受難の場面が情熱的に描かれている。イエスの顔は目を大きく開き情熱的に絵と向き合うものの心を覗き込んでいるようである。「あなたも苦しみを負っているのだね」と声が聞こえてくる。この絵のイエスのように目を見開いて生きてゆきたい。